語義失語の初期における語の崩壊特徴

○藪 貴代美¹・阿部 純一²

(¹ 高橋脳神経外科病院・² 北海道大学 (名誉教授))

キーワード: 語義失語, カテゴリー特異性, 側頭葉

Linguistic aspects in a case of Gogi aphasia

Kiyomi YABU¹, Jun-ichi ABE²

(¹Takahashi Neurosurgical Hospital, ²Hokkaido Univ.)

Key Words: Gogi aphasia, category specificity, temporal lobe

目 的

左側頭葉前方の萎縮から始まる意味性認知症では、「語義失語」といわれる言語症状を示す。この語義失語の特徴は、単語を正しく聞き取り復唱することができるにもかかわらず、その言葉の意味がわからないこと、言葉を想起することが困難で、絵の呼称の際には語頭音のヒントが無効であること、発話は流暢で文法は保たれていること、表層失読がみられること等である。たとえば、「かき氷」と言われて「かき氷、かきの氷のことですか?」というような反応がみられる。変性疾患のため、病期によって言語症状は進行していくが、病初期は、意味理解障害が軽度であり、言葉がでないという発話障害から始まることが多い。脳の萎縮の進行に伴い、意味理解障害が強くなり、さらに非言語的知識を必要とする物品の使用障害が生じるといわれている。徐々に語彙が減少していく中で、低頻度語や低親密度語が早い時期に障害を受けるのか、特定の 카테고리의語が障害を受けるのか、一旦障害された語は常に障害されたままなのか、脳の障害部位と語彙との関連があるのか等まだ十分にわかっていないことが多い。また、そのメカニズムも意味記憶障害そのものの貯蔵障害であるという考えとアクセス障害であるとする考えがある。

本研究の目的は、病初期段階の語義失語において、カテゴリー特異的障害があるのか、障害が見られる語に一貫性はあるのか、呼称・理解ともに障害される語があるのかを調べ、語義失語のメカニズムについて検討することである。

方 法

症例. 症例は72歳の農業に従事している右利き男性である。2011年2月17日に初めて病院を受診し意味性認知症と診断された。このときの訴えは「3年前から言葉が出にくくなった」「漢字も思い出しにくくなった」というものである。脳血管疾患の既往はなく、神経学的検査で異常はみられなかった。脳画像所見では、MRIで左側頭葉前部に特に強い萎縮がみられ、脳血流SPECTでは左側頭葉下部に強い血流低下を示した。また、本症例の記憶障害は年齢相応の物忘れ程度であり、日常会話場面での応答はスムーズであった。また、知的機能の低下や物品の使用障害は認められなかった。

材料. 「失語症語彙検査 (藤田ら, 2001)」の「意味カテゴリー別名詞検査」を用いた。この検査は、10のカテゴリー (屋内部位、建造物、乗り物、道具、加工食品、野菜果物、植物、動物、身体部位、色) で構成され、それぞれ高親密度語10語、低親密度語10語の計20語、合計200語からなる検査である。

手続き. 「意味カテゴリー別名詞検査」の聴覚的理解課題と絵の呼称課題を行った。聴覚的理解課題は、聴覚提示された名詞に対応する白黒の線画を同じカテゴリーの10語の中から選ぶ課題である。絵の呼称課題は白黒の線画の名前を口頭で答えるものである。刺激の提示順は検査マニュアルにしたがった。この検査は2011年11月から2か月おきに、計3回

実施した。この間、脳の血流低下部位の広がりや失語症状の進行はみられなかった。

結 果

カテゴリー特異的障害があるのかについて3回の検査の合計で調べた結果、理解課題、呼称課題ともにカテゴリーによる差が有意であった ($\chi^2 = 22.77, p < .01$; $\chi^2 = 21.34, p < .01$)。理解課題の正答率は平均81.2%であった。良好であったカテゴリーは、身体部位96.6%・道具95%・屋内部位95%であり、低下が大きかったのは色51%・植物65%であった。また、色と植物のみ親密度の効果がみられ ($p < .01$; $p < .05$)、高親密度語の方が低親密度語より成績が良かった。呼称課題の正答率は平均53.3%であった。良好であったのは、身体部位71.5%・屋内部位78%・建造物67%であり、不良であったのは、植物20%・加工食品36.5%・色と野菜果物45%であった。また、親密度の効果がみられたのは、動物・身体部位・色・道具・加工食品・植物・乗り物であり、いずれも高親密度語の方が低親密度語より成績が良かった。

障害が見られる語に一貫性があるのかについて検討を行った。理解課題では、3回とも正答であったのは200語中137語であった。残り63語のうち3回とも誤答であったのは14語で、誤答全体の22.2%であった。誤りが浮動的であったのは34語で、浮動的な誤りは誤答全体の54.9%であった。また、理解できていたのに経過とともに理解できなくなったのは15語あった。一方、呼称課題は、3回とも正答であったのは200語中84語であった。残り116語中、3回とも誤答であったのは70語であり、誤答全体の60%であった。浮動的であったのは25語で、誤答全体の21.6%であった。また、呼称できていたのに経過とともに呼称できなくなったのは21語であった。

理解・呼称ともに誤答であった語は、1回目25語、2回目33語、3回目23語であった。このうち3回の検査とも誤答であったのは12語であった。逆に理解・呼称が3回の検査とも正答であった語は200語中77語であった。

考 察

変性疾患で生じる語義失語の病初期においては、理解障害より発話障害の方が強いことが確認され、理解・発話ともにカテゴリー特異的障害がみられることが示された。先行研究では色・身体部位や屋内部位で良好という報告があるが、本症例は色が不良な点以外は先行研究と一致していた。障害がみられる語の一貫性は、呼称では浮動的な誤りが誤答全体の21.6%と少なく、一旦障害された語は障害されたままであることが示唆された。また、理解・発話において双方向性の障害を示す語が少なかったことから、病初期においては、意味記憶の貯蔵障害よりアクセス障害の方が主となる障害であると考えられた。